

令和2年度 第3回多文化都市八戸推進懇談会 会議録

日時 令和3年2月19日(金)

16時00分～18時00分

会場 八戸市公民館 会議室

<次 第>

1 開 会

2 会 議

(1) (仮称) 八戸市民による文化芸術の推進のための基本計画策定について

(2) その他

3 閉 会

●事務局

ただ今から令和2年度第3回多文化都市八戸推進懇談会を開催いたします。

本日は出席委員13名、欠席委員2名となっており、委員の過半数以上が出席されておりますので、会議が成立することをご報告申し上げます。

それでは、ここからの進行は会長にお願いいたします。

●会長

それでは皆様、どうぞよろしくをお願いいたします。事務局が各団体にヒアリングを行った内容を皆様と共有し、なおかつ事務局の方から新しい考え方の提案が示されるとのことですので、皆様から忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。早速ですけれども、事務局のほうから説明をお願いいたします。

●事務局

お手元の資料1をご覧ください。前回の会議で、外部との意見交換を行うと説明しましたが、現時点での結果を取りまとめたのでご報告します。

2月3日～12日までに民間の5団体と2個人、内訳は演劇団体1、音楽団体1、伝統芸能1、伝統工芸1、ストリートダンス1、福祉関係2となっております。このほかに、八戸市文化協会及び所属している14団体とVISITはちのへからヒアリング調査を行い、その結果を「1. 当市の文化活動の現状についての認識」、「2. 文化芸術活動全般について」、「3. 情報発信について」、「4. アーティストバンクについて」、「5. 各専門分野について」でまとめましたので、その主なものをご説明します。

まず、当市の文化活動の現状についての認識ということで、公共施設等については、「はっちやまつりめぐり広場等は、どう活用できるのか、コンセプトが伝わりにくく、若者が気軽に利用できる体験や飲食などのコンテンツがないと感じる」、「はっちでは「見せる から 興味をもつ」までの流れはあるが、その先の「取り組んでいる人とつながる・会いに行く」方法が見えない」、「はっちやマチニワなど、スペースがたくさんあるのに活用されていない」という意見がありました。

その他文化芸術についての意見としては、活動している当事者の声としては「八戸の文化活動は際

立った特徴や活発であるという印象がない」という意見がありました。この「八戸は文化活動が活発ではない」と意見とは反対に、市外の人や他都市から移住してきた人から「八戸は文化活動が活発だ」という話を聞くという意見が複数ありました。

そのほか、「伝統文化親子教室など、次代を担う子どもたちのための事業を実施しているが、市にそれが伝わっていない・連携できていない」、「学校と連携したいという気持ちはあるが、どうすればいいのか、どこに相談すればいいのかわからないため、市が学校と各団体を繋ぐ仕組みがあると良い」、「練習や発表の場の確保が難しい。また、希望する設備がある施設がない」という意見がありました。この「練習や発表の場所がない」という意見とは反対に、「八戸は文化施設や団体が多く、「受け皿があるまち」だと思う」という意見もありました。ほかには、「生徒が大学進学や就職とともに教室をやめてしまったり、八戸を離れてそのまま戻ってこない」、「八戸は新しい取組を行うが、その取組が続かないイメージがある」、「団体の NPO 化について、市民連携推進課に相談しているが手続きが煩雑で、進んでいない状態である」という意見がありました。

2 ページ目にまいりまして、文化芸術活動全般についてですが、「高齢化や後継者不足が問題であるため、担い手や支え手の育成がまずは必要である」という意見のほか、「後継者不足については、受け入れる側にも問題があると感じており、伝統芸能やそれ以外の文化芸術活動でも、敷居が高いという印象があるため、団体側にも変わっていかうとする気持ちは必要である」、「はっちなどの施設や空き店舗などを活用して、一定期間はどこに行っても文化芸術に触れることができる八戸芸術祭のような取組があっても良いのではないか」、「文化芸術全般について気軽に相談できる窓口があると良い」、「集まりやすい場所、バスなどの公共交通機関を利用してくることができる場所で活動を行うことが必要である」、「中央で有名になった人に安易に飛びつくのではなく、地元にもっと優れた人材がいる場合があるので、地元で根差して活動している人材を大いに活用することが大切である」、「山車小屋はできるだけ町内、またはその近くに確保してほしい。子どもたちや製作者が集まらず、やがて途絶える恐れがある」、「文化と観光は密接な関係にある」、「文化だけ、産業だけ、ではなく、全てが一緒に向上するような仕組みが必要である」という意見がありました。

情報発信については、「オンラインショップなどの HP の充実や SNS による発信の強化が必要である」、「どこでどのような活動をしているのかわからないため、例えば菱刺しマップのような、情報が一目でわかるような媒体が必要である」、「各団体のみでの情報発信だとなかなか浸透しないため、市や各団体のイベント情報等を一覧で見ることができるものがあると良い」、「ワークショップを開いても、参加するのが関係者や知人ばかりで新たな参加者の発掘になっていない」という意見がありました。

次に、アーティストバンクについては、「良い制度だと思う」という意見が複数あったほか、「登録されている団体が何を求められているのか、指導なのか・募集なのかによって、登録するかどうか違って来る」、「若年層の利用がメインであると思うので、スマホで簡単に利用登録ができるなど、手軽さが重要である」、「自分が求めている技術を持っている人の情報を知る手段となる」、「各専門分野にどのようなすぐれた人材がいるのかを洗い出し、リストアップして、公的機関を中心に市外・全国に PR、各種講座の開催、教育等への活用などを図ってほしい」、「知らない分野や人を知ることができるものとして活用したい」という意見がありました。

3 ページ目にまいりまして、各専門分野についての課題や意見についてですが、まず、演劇分野について、「はちのへ演劇祭の活動により活性化はされてきたものの、活発であるとは言えない」という意見のほか、後継者の育成、演者、裏方スタッフの高齢化、稽古場や舞台製作場の確保やそれに伴う費用の捻出などが課題として挙げられました。

音楽分野については、大型打楽器や 40 年分の楽譜などの恒常的な保管場所不足や「演奏会場の確保が難しい」、「プロのクラシック団体を主催して呼ぶことができなくなっている」という課題や、「合唱は市民が多数参加できる文化であり、例えば 3 年間隔くらいで、知名度が高い曲をアマチュアのオーケストラと合唱団で演奏するというような取組を行うなどがあれば維持できる」という意見、「どのような演奏会をどのような周期で行うのかについて、ビジョンを持って、計画を立てて行う必要がある」という意見がありました。

伝統工芸分野については、制作から販売が生業となるような仕組みづくり・支援・補助による後継者の育成や、三社大祭やえんぶりなどのお祭り期間中にまちなかで販売できる仕組みづくりや、市内ホテルなど観光客が手に取りやすい・購入しやすい場所での販売など、観光分野との連携強化による販路の拡大、といった意見のほか、「例えばワークショップの共同企画の立案・実施、商品の販売など、美術館との連携ができると良い」という意見がありました。

ストリートダンスでは、「県内では、八戸はストリートダンスが盛んである」という意見のほか、「高校卒業後の、専門知識を学ぶ育成機関や就職先といった受け皿がない」、「映像配信・オンラインイベント等の普及により、機材があればどこでもステージができるようになり、人が集まるイベントにこだわる必要が無くなったことから、これからはイベント主催者が出演者を選ぶ時代は終わり、魅力あるイベントでなければ出演者から選ばれないという時代になっていくと感じる」という意見がありました。

福祉分野については、「障がい者の場合、1 人で文化施設等に行くことができない人も多く、付き添う保護者や施設等が積極的でないと触れる機会が少ない」、「はっちは狭い、南郷文化 H は遠いなどの理由から、市内に文化活動のために利用したいと思う施設が少ない」という意見がありました。しかし、「集団行動が苦手だったり、発達にばらつきがあるなどハンディキャップのある子どもとその家族のための特別開館日であるオレンジデー（こどもはっち）は非常によい取組だと思う」という意見がありました。そのほか、「グループホームに入所している人などは、ホームの利用料金やその他生活費を支払うのに精一杯で、文化芸術分野にまでお金を回せない人が多い」、「障がい者及び家族、施設職員などの支援者が気軽に参加できるイベント、例えば、声を上げる、寝転びながら観る、一緒に歌う・踊る、途中退席 OK なコンサート、作品に触れられる美術館企画などのイベントがない」、「文化施設にも作品等に自由に触れるコーナーや障がい者が作成した作品のみを展示する部屋などがあれば、障がい者のなかにも「やってみよう」と思う人が増えるかもしれない」、「施設のバリアフリー化整備をする際は当事者である障がい者の意見を取り入れるべきで、身体障がいでも障がいの種類は様々であり、通路を広くすれば良い、スロープを作れば良いといった単純なものではない」という意見がありました。

最後に、伝統芸能分野については、「えんぶりや三社大祭について、本番以外閉鎖的に感じる。練習や山車作りの期間中、何をしているのか分かりづらい。体験の場が組に参加すること以外無いことや、若者に興味を持ってもらえるようなコンテンツが無く、もったいない」という意見がありました。

以上で、民間文化芸術団体等ヒアリング調査の結果についての説明を終わります。

●会長

どうもありがとうございました。続けて資料 2 について、事務局より説明をお願いいたします。

●事務局

委員の皆様には、これまで色々なテーマでご意見を出していただいております。また、今回ヒアリングを行い、活動されている方と直接お話しすることで、紙でアンケートを集めたときとは違って熱意が伝わってきて、色々と考えさせられることがございました。特に障がい者関係の方とは、行政のほうから障がい者の文化鑑賞について相談を受けるというのは10年前では考えられなかった、ぜひ前向きに取り組んでもらいたいというお話しを頂いたところでございます。

改めて計画の内容を検討したところ、資料左側に記載しております平成27年に策定した文化のまちづくりビジョンの柱になっている8項目を資料右側に今回の計画ではこのように整理しようということで、将来目指すべきビジョンとして4つ、戦略群として6つ掲げてお示しをしたというところでございます。この内容について、具体的に取り組むような事業が整理された段階で改めて見直すところは見直しますということで、これまでご説明しているところでございます。

先程の話に戻りますが、委員の方からは非常に幅広く、バランスよく網羅していると評価を受けた一方、「メイン事業はなにか、主軸が分かりにくい」「刺さらない」という意見もありました。実際にヒアリングの中で感じたこととして、実効性をあげていく、つまり向こう5年間で八戸市を取り巻く文化の環境が変わったと感ずることができれば良いと考えたときに、改めてこの柱で良いのか、再度検討するに至ったというところでございます。具体的にこうします、ということは今時点ではお示しませんが、以上のことを前置きとしてお話しさせていただきます。

その上で、平成27年に文化のまちづくりビジョンを定めてから、これまで様々な文化事業に取り組んできたところでございますが、特に8つに整理してある中で、「6 アートプロジェクトによるまちづくり」という項目は新しい項目であり、実際に様々なアートプロジェクトに取り組んできたと考えております。そういった新しい取組があった一方で、必ずしもビジョンに示している項目全てが十分に行われたというわけではなく、課題も残った中で、色々アンケート調査等で浮かび上がってきた声もありました。改めての確認ということで簡単にご説明しますが、まずは文化芸術活動者（アーティスト）の視点ということで記載をしておりますが、アンケートの中にもいくつか意見として出てきておりましたが、活動への認知・参加が広がらないという課題がありました。特に象徴的だったのが、「参加者はいるが、関係者や知人ばかりで広がりが少ない」というご意見でした。他に、「施設が不十分だ」という意見もございました。さらには、「発表の機会や活動の場所が不足している」という意見があり、これにつきましては文化協会ともお話しさせていただいた中では、「学校に出向いて活動する機会があると良い」という意見とも結びついている声でございます。後は「後継者が不足している」という声もありました。

一方で、普段文化芸術活動をしていない観客の視点ということでは、アンケート調査から非常に施設や企画に対する認知が低いということがわかりました。さらに認知が低い人は関心も低く、関心が低い人は文化芸術に対する評価も低いという結果になりました。また、特定の分野に関心があるわけではなく幅広い分野に関心がばらけている状況であることや、情報の入手（イベントの開催情報）については若年層と高齢層では二極化しているということがアンケートから読み取れました。

今回、新たに障がい分野の関係者の方にヒアリングを行った中で、障がい者の文化芸術活動への参加や創造活動に取り組んでいる方もいるが、非常に限定的であり、文化芸術活動への入口である鑑賞の機会が非常に限られているという話が印象的でした。

こういった課題がある一方で、新たな取組として3つ資料に記載しましたが、それぞれの取組につきましては内容的に多岐にわたっているもので、これだけの短い情報で説明にはならないが、先ほどの

観点・課題と比較したときに、こういう取組があるということで記載させていただきました。1つは八戸工場大学ですが、産業都市である八戸の工場資源に着目した取組となっております。入口は工場好きの集まりということで、特に文化芸術好きということではない方々の集まりではありますが、活動の中では様々なアートワークショップをはじめ、アーティストの方々との交流であったり、自ら写真を撮ってそれをはっちの紹介ブースの写真として使用されたり、文化芸術活動と言っていいような内容が含まれた、入口は異なるものの、結果としてこういう市民活動が行われたプロジェクトとなりました。一緒にアートプロジェクトを行った地元の企業からも評価をしていただいて、会社の IR への掲載や株主説明でも事例として取り上げていただいたりと、ある意味産業振興の部分でもアートの取組が行われたという事例となりうると思います。

次に、市民集団まちぐみということで紹介させていただきます。これも多岐にわたる活動ですが、先だって日本建築学会論文の研究対象ということで、論文が出されたということのを伺いまして、読ませていただきました。今日のテーマとの関係で取り上げると、起点ははっちの事業として始まっておりまして、はっちのまちぐみというような関係で活動をしているというベースがあるわけですが、その発展形として、まちぐみと市民との間に社会的関係が構築され、その結果、次なる活動に展開していくということで、そういうことが非常に評価されている論文となっております。これは、先ほど課題でありました活動の認知や参加が広がらないということとは非常に対照的な事例として取り上げさせていただきました。

3つ目は横丁オンリーユーシアターということで、発表の場所の不足という意見がありますが、この取組は街中を劇場化した横丁のパフォーミングアーツということで、現在は中央からアーティストが応募するぐらいの企画に成長しているということで、そういう広がりを見せることができるようなプロジェクトとして取り上げさせていただきました。

「アンケート等から浮かび上がった課題」と「新たな取組の成果」では非常に対照的な部分があり、両者は何が違うのかということに対して、資料中に「ポイント1 検証」として記載してありますが、「WHAT?」「WHY?」「WHY NOT YET?」「HOW?」という4つの項目を考えながら、課題解決の仮説を立ててトライ&ラーン、実践し、そこから学びながら実践を直していくということを基本計画の中に組み込んでいくことが必要ではないかと整理しました。

次に、「ポイント2 文化政策を取り巻く環境変化」ということで、文化政策の領域の拡大、担い手の多様化、文化政策と都市・産業政策との結び付きといった環境変化がありました。そうした中で、文化芸術・伝統文化・文化財といった狭義の文化活動あるいは文化政策ではなく、その周辺にある教育・福祉・産業振興・まちづくり等といった他の分野と行き来しながら、文化の効用を広く認知してもらい、それが他分野の振興に結び付くし、ひるがえって文化の振興にも結び付くという理論でございませうけれども、前の懇談会で、両者を橋渡しするような機能な非常に重要ではないかという意見が委員からも出た次第でございませう。

そして「ポイント3 担い手」ということでございませうが、担い手の類型としていくつか挙げております。プロフェッショナルな芸術団体・アマチュアの文化団体などのほか、赤字で記載している中間型支援組織といった類型でございませう。中間型支援組織がどういうものかと言いますと、若い才能の発掘・創造や発表の場の提供・地域と出会いのコーディネート・教育や福祉など異分野との橋渡しをするような支援型の組織でございませう。組織類型としては、株式会社や財団、さらにはアートNPO や任意団体などが挙げられます。先程、担い手の多様化ということで、環境変化のこともお話ししましたが、例えばアートNPOのような組織が、全国的には中間支援の機能を果たしてい

るという事例が見受けられます。これらの団体の強みというのは、行政は人事異動の関係でどうしても担当が数年で変わってしまうというデメリットがありますが、それと比較すると非常に専門性を持ったスタッフが揃えることができます。ノウハウ・経験の蓄積や独自のネットワークを有する団体があることは非常に強みであると捉えられます。そうした中で、行政の役割は何かだとか、整合性がないというような弱点を補完するような担い手の必要性はどうかというのが一つの議論のポイントになるかと思います。

次に「ポイント4 計画の時間軸」については、10年程度の時間軸の中で、5年間で戦略的に取り組むことは何か、具体的に先程の冒頭でも述べましたが、八戸の文化を取り巻く状況が変わったということが、次の文化政策の充実・牽引につながっていくということを考えますと、最初の5年間に何に具体的に取り組んでいくかを絞り込んでいくことも一つとなってくると考えております。5年間のトライ＆ラーンの期間を経まして、次の5年間は目をさらに大きく育てる期間、さらに次の5年間は多文化都市の次のステップということで、計画を見直していくことが考えられるかと思います。参考までにトピックスということで、主なイベントを掲載しております。今年11月に新美術館がオープンすることや、八戸市公会堂・公民館につきましては現在公民館が工事中であり、来年には全施設がリニューアルオープンとなります。また、時期は未定ですが、是川遺跡が世界文化遺産に登録されると伺っております。2024年には三陸復興国立公園指定10年、2030年には三社大祭が310年を迎え、2031年ははっちが20周年・新美が10周年を迎えるということで記載しております。

最後に「ポイント5 拠点施設の役割」ということで、文化施設、特に公共の文化施設の役割や使命は何か、ということに記載しております。例えばはっちでは、先だって次の10年に向けた方針を策定しており、ほぼ形が出来上がってきていますが、協働型の企画を重視しているほか、新美術館については、「学び」をキーワードとして教育との連携を進めていることが、非常に特徴的であると言えます。また、青森県立美術館が中心となっていると思いますが、県内の他の美術館との「5館連携」というような形で全国に訴求力を高める取組もスタートしているところでございます。そのほか、八戸市公会堂・公民館、ブックセンター、是川縄文館などを下に記載しておりますが、一番下に記載しているVISITはちのへについては公共の文化施設ではありませんが、VISITはちのへでは中期運営方針を定めていまして、大きく文化に関係するところだと、交流人口の拡大ということで、三社大祭・えんぶり関連の商品づくりとプロモーションを進めるということを方針として固めています。また、地場産品振興については、伝統工芸品や食という観点もあるかと思いますが、商流づくりやプロモーションに力を入れていくということで方針を定めていると聞いております。

これらを踏まえて、例えばということで資料右側に6つの取組案を掲げております。1つ目は「文化活動への認知を広げる取組」ということで、これはアンケート調査の結果や以前の懇談会で委員からも発言もありましたが、いわゆるアートフェスというような取組を行うプランでございます。鑑賞・創造・参加の輪を広げる取組であり、全体を集めて広報することによって広報戦略にも結び付くのではないかと考えられます。今回、例示として「ベップ・アート・マンス」の事例を資料として添付しております。これは大分県別府市の取組で、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会が主催しております。2017年の例でございますが、11月から約1か月間に別府市内の各所（個人宅を含む）を会場として開催されました。質や規模を問わず、誰でも・何でも登録可能で、イベントに対する助成金は出ませんが、パンフレットやWeb広報で全体として広報する仕組みとなっており、連絡窓口や販売窓口の代行も行っているとのこと。

開催実績については、2010年は実施団体が27団体だったのが2017年には93団体に、企画数は

43 企画から 107 企画に伸びているということで、市内のみならず、大分市や県内・県外からも参加しているという状況です。資料裏面になりますが、このように一覧で各活動を紹介することで、各団体が単発でイベントを広報するよりも、認知を広げる・参加の輪を広げる取組として非常に優れているのではないかとご紹介いたしました。

資料 2 に戻って、2 つ目の「新たな創造活動の活性」ということで 2 つ挙げておりますが、多文化補助金の見直しということで、これまでの会議の中でも委員から意見が出ておりますが、上限額の引き上げや複数年の支援などということも、創造活動への活性化へつながっていく見直しではないかと考えております。一方で、金額が大きくなって複数年で支援するとなると、当然審査の方法や結果報告についても公開で行うなどのことも必要ではないかということでございます。

次にプロ・アマの協働の拡充ということでございますが、すでに市内では 3 年ほど前からイカール国際音楽祭というイベントが開催されております。中央の第一線で活動されている演奏家（一部国外からも）を招いて、スクール形式、つまり音楽を習いたい方がお金を払い、一流の講師から学ぶことがこのイベントのコアとなっておりますが、せっかく一流の演奏家が来入しているので、ぜひ地域還元してほしいということで、市の方でも運営費の一部を補助しながら、地元の音楽団体やジュニアオーケストラと一緒にコンサートを開催しています。昨年はマチニワで無料のコンサートを開催したほか、公会堂文化ホールでは一流の演奏家の演奏を 2,000 円程度の入場料で聞くことができるイベントでございました。演劇分野でも、東京で活動されている方とリモート練習や実際に体育館などでの稽古を重ねて、オンリーユーシアターに参加された方もいたということで、プロ・アマの協働ということはすでに活動としてあるわけですが、そういった機会を拡充することによって、創造活動を活性化していくということは、一つの方向性として挙げられるのではないかとということで、例示として掲載しております。

3 つ目でございますが、「活動機会の拡充、教育や福祉等異分野との連携によるアートの社会的価値の可視化」ということで、先ほども文化協会から「学校へ行って子どもたちに教える機会があると良い」という意見があったということをお話ししましたが、そのアプローチとして、一つはアートミーツスクールやホスピタルというような、アーティストが学校・病院・福祉施設に出向いていくという取組で、アーティスト側から見ると、活動機会の拡充ということですが、連携する分野ごとにそれぞれアートの価値が発揮できれば、それが非常に社会的価値として可視化されるのではないかと、そういう取組でございます。これを実施するためには、コーディネートする機能が必須であるということになります。さらに、参考としてアート NPO である「芸術家と子どもたち」の名前を出させていただいておりますが、アーティスト側からの働きかけでそれを習う・体験するだけでなく、アーティストが学校などに入って、アートが果たす役割自体を模索する取組、逆に言うとアーティスト側が成長する機会としてこういった機会を設ける取組でもあり得ると考えております。もう一つは、やはり人と人・アーティストとアーティスト・地域とアーティストを繋ぐための一つのツールとしてアーティストバンクということで、他都市でも取り組んでいる事例がございますが、委員からも提案していただいた取組です。市内のアーティストや活動の見える化ということで、非常にヒアリングでも良い取組だという評価や協力したいというお声もいただいた項目でございます。

4 つ目は「鑑賞機会の拡大の取組」ということで、これは主に公共文化施設の役割ということで良いのではないかとと思いますが、例えば障がい者の方々も鑑賞できる機会の提供ということで、バリアフリーといったハードの整備はもちろんですが、いわゆる企画の部分でも非常に工夫が必要だということがヒアリングで分かりました。その際に、単に美術館や公会堂ホールに行って鑑賞するというこ

とも、もちろん機会を増やすということで大事ですが、例えば街中に出てきたときに買い物できるような仕組みも必要ではないかということで、障がい者の方々の中にはなかなかレジに行ってお金を払う・買い物することができない方もいて、先進的な福祉都市では障がい者がスーパーに行き買い物をすることができる仕組みが作っているところもあるということなので、中心街にある文化施設ですので、そういう商業と連携した取組があればより一層、障がいをお持ちの方が街中に出てくる機会になるのではないかと思います。しかし、障がいといっても様々で、通り一遍の対応ではできないということもありますので、そのあたりは非常に難しい取組でもあると思っています。そして、鑑賞機会の拡大としてもう一つ、ポイントとして取り上げさせていただいたのは、シニア向けの文化プログラムの充実という視点です。これも委員からの提案にもありましたが、人口構成でのシニアの数は圧倒的に多いという状況の中、実は我々の取組として南郷文化ホールで「南郷名画座」という、昔の映画を見る機会を提供するという事業をやっていました。しかし、これは10年経過したということで予算を削られ、やることができなくなったという経緯がございます。シニア向けのプログラムを充実することを計画で位置付けていないと、10年経過したから終了ということで予算を削られてしまう恐れもあるということに改めて感じましたので、鑑賞機会の拡大ということでこういうことも取り上げていかなければならないと考えました。

そして5つ目の「文化政策と都市政策の融合」ということでは、他都市ではよく有名な芸術祭というものがありますが、こういったことにつきましてはやはり相当長い期間かけて準備をしていかなければいけない事になりますので、先程のトピックスの中で三陸復興国立公園指定10年目だとか三社大祭310周年だとかありますけれども、こういったことと関連付けさせながらにか芸術祭みたいなことに取り組んでいくことも案としてはあり得ると思います。

最後に「担い手の多様化」ということで、先程説明しました中間支援を持ったアートNPOなどの設立・初動期の支援をすることで、こういった担い手を増やしていくことも、今ご説明したような様々な取組を実際に実行に移していくためには非常に必要なことなのではないかということで、こういう方向付けも計画の中で必要ではないかということで出させていただきました。

これらはあくまで一つの案ということでお示ししておりますけれども、実際やっていくこととなれば資料右側にマネジメントと書いておりますが、予算や運営組織、運営スタッフ、さらには地域企業や市民の協力といったことが必須になってくるということがございます。それらを実行に移す、あるいは支援を仰ぐというか参加を増やすというか、やろうというような雰囲気醸成させるためにもどういった計画であるべきか、ということをお考えたときには、非常に整理されていて良いビジョン・戦略かもしれないが、もう少しとがったような書きぶりでも良いのかもしれないと思ったりもしておりますが、この辺も含めて色々ご意見等をいただければと思っております。

最後になりますが、資料上部に「伝統の伝承・振興」「文化財の保護・活用」「現代的芸術文化の振興」と3つ掲げており、「現代的芸術文化の振興」にのみ色を付けておりますが、文化財に関する分野については具体的に触れられておりません。これまでも申し上げておりますけれども、保護や保存の部分で突っ込んだ整理はこの計画の中ではできないと考えております。せいぜい活用の部分で次回以降何か方針が出せればということで、今回は芸術文化の振興の部分で、主に取組ということで整理させてもらった資料ということでご理解いただければと思っております。

●会長

どうもありがとうございました。今説明していただいた資料2について、頭の中を整理して進めていきたいと思いますが、まず、今日の会議は何かを決めるというものではございません。次回以降は、少しずつ取りまとめをしていきたいというように考えておりますので、次回まではしばらくいろんな材料・資料を基にして皆さんの方から色々のご意見を頂戴し、基本計画という形でまとめていきたいと思っております。これは自治体の基本計画であり、民間とはまた異なるので、ある意味ではミニマムなベースというか、最低限のものはきちっと網羅しておかないといけません。場合によっては、金太郎あめみたいな話になるかもしれませんが、そういうものを含めて、基本計画の中に盛り込んでいかないと、先程の説明の中で、10年ぐらいのスパンのうち前段の5年ぐらいでうんぬんというお話がありましたけれども、最終的にアクションプラン、実際に事業を実施計画で実践していく際に、今度は行政評価・効果測定が伴います。先程のような予算がつけられたり減ったりとか、色々出てくるということもありますので、そのアクションプランの中で、とがったような、色々な事業計画が出しやすいような基本計画にしたいということです。

事務局の説明ありましたけれども、資料2の一番右にマネジメントとして破線で囲われた箇所があり、その下に青掛かった四角で囲われていますが、担保する裏付けとなる計画作りを目指すということで集約されているわけですが、次回以降はこの辺もかなり意識しながら、そして前回の会議でも出てきましたが、将来ビジョンや戦略群も含めて、本当にこれでいいのかというようなところについて、皆さんからのご意見を頂戴したいと思います。

国の大きな流れとしては地方創生というのがあります、まだ予算いっぱい持っているのでやり方によってはそういうものをいただきながらということも考えることができます。そういうことが得意な自治体や、担い手の多様化ということで話がありましたが、中間支援ということでアドバイスやプッシュしてもらえそうな、一般社団法人あるいはNPOのような中間支援組織みたいなものを、行政と一緒に住民の活動支援するような形で形成される、あるいは今既にあるのかもしれませんが、もう少し力を発揮する、そういうようなことが支柱になるかと思っております。先程、地方創生の話をしました、これはまちづくり、あるいは地域づくり含めて、それぞれの小さい集約支援とか、あるいは自治体支援に対しての中間支援が全国的にかなりたくさんあって、そこがいろんな予算取りやアドバイスをし、地域のさまざまな成果に力を貸してくれるというようなことをやっていますので、そういうような組織が生まれて、そして力を発揮して、やがて行政は後押しすれば、あとは住民が活用してできるような形というのが一番望ましいというふうに思っています。いずれにしても、そういうような形でまとめていきたいというふうに思っております。かなり大きく見て、なおかつ小さく見ていかなきゃいけないというようなところに今なっているかと思っておりますが、自治体が策定する基本計画であるということをまず頭の中に押さえていただきたいと思います。それで今回、それに民間が加わったということで、大分県別府市の事例が挙げられました。別府は、市が持っていた施設を別府大学短期大学に指定管理者を任せたというような話を別府大学の副学長から聞いたことがあります。

それでは事務局から資料1のヒアリング結果と、資料2の説明がありましたけれども、これについて何かご質問やご意見があればお願いいたします。

資料2についてはそれぞれ非常に練られているというか、そういうものが散見できます。例えば、「ポイント4 計画の時間軸」という中で「5年間に戦略的に取り組む」という文言を入れたり、現代的芸術文化の振興ということで挙げられている1番目から6番目までの取組もかなり熟考されています。先程の説明にもありましたが、活動者の視点・観客の視点・障がい者の方々の視点を踏まえ

て、どのようなものが現在取り組まれているかということで、取組のほんの一部ですが工場大学・まちぐみ・オンリーユーシアターということで挙げられていますが、いかがでしょうか。

●委員

基本的な質問ですが、資料2の現代的芸術文化の振興の枠の中4番目の例として挙げられているシニア向け文化プログラムの充実のところの話であった南郷名画座について、10年経過したから予算が切られたという説明がありましたが、具体的に駄目になった経緯をもう少し詳しく聞きたいです。

●事務局

南郷名画座は、実行委員会に対して補助金を出していましたが、大体補助金は有期というか、5年や10年のタイミングで見直しを図ることが多いです。そうじゃない部分もありますが、南郷名画座はそれに引っ掛かりました。高齢の方に人気があり、結構入場者の多いイベントでしたが、文化施策としてどうだとかという議論なしに、もう10年やったから補助金は終わりということになりました。こういったことに対応していくためには、ちゃんと基本計画の中でシニアに対する観賞自体がどうですというところをちゃんと謳い、その取り組みの一貫であることを説明する必要があるということです。

●委員

演劇や音楽などの練習場所について、以前にも話をしましたが、旧番屋小学校の体育館を練習場所として使えないかということで話があり、結局それはなしになりました。また、廃校になった美保野小・中学校について、あそこも音を出しても大丈夫なところなので、練習場所に困っている方、特にオーケストラの方々は楽器を運ぶのが大変ですから、そういう場所を何か探してあげる手だてがあればいいかなと思います。演劇は、舞台装置は作らないと駄目ですが、教室一つあれば練習場所として十分ですので、その辺一つ考えてもいいかなと思いました。

あと、山車小屋についてですが、柏崎小学校跡地に近くの組の山車小屋を作ることができれば、もっと子供たちも何かできるし、若い人たちも参加しやすいのかなということを、いつもあそこ通りながら思っている次第です。

市や各団体のイベントの情報を一覧で見ることがあると良いという複数意見ありましたが、はっきり言ってお年寄りの方は新聞取っています。ところが、若い人、息子夫婦もそうですけども、もう新聞を取っていません。新聞を見ると、今日はどんなイベントがあるのかを掲載しており、お年寄りの方々はそれを見て、来ていただいたりしますが、若い人たちはそういう情報を、もうスマホか何かいろんな形でしか発信できないのかなという気がしますので、その辺もやっぱり意識してやっていかないと駄目なのかなという気がしています。

南郷名画座についてですが、今はDVDでも見ることはできますが、音の鳴る中でやりましょうという一つのポイントもあったので、なくなったのは非常に残念です。公民館でやっている60歳以上のシニアの方々の演劇はこれからも続けて行きたいなと思っています。

また、後継者の育成については、舞台技術や大道具・衣装の制作等の舞台スタッフ、これもアート&コミュニティのほうで公会堂や公民館を使って、高校生には夏休み、一般の方々には冬の期間で、何とかそういう興味を持ってもらうように、ということで体験する企画を行っているのですが、特に一般の方は、仕事の後に18時に来て20時頃までやるというのはなかなか難しいところがあります。

でもこれは今後も続けていく、継続が力なのかなという気がしています。

●委員

今の意見に付け加えたいと思いますが、私が学生時代の頃に、東京に「びあ」という情報雑誌があって、その雑誌を見ると全部どこで何やっているかというのが分かったという、そういうものがありました。これ予算も関係することですので、あくまで意見としてですが、橋渡しとなるような中間支援型組織は必要だと思います。例えば、今はえんぶりの時期ですけれども、えんぶりとなったときに、県外から来た人が八戸の博物館に来ます。けれども、はっちでもえんぶりに関するイベントをやっています。そういうふうにしていろんなところで開催されている場合に、えんぶりを見るのであればここ、ここ、ここに行けばいいなというのを一目で見ることができるよう、そういうパンフレット・情報誌があれば良いと思います。我々は八戸の人間ですからわかりますが、県外から来た人たちがすぐ見ることができて、どこに行けば良いかすぐわかるような、そういう媒体があれば良いと思います。文芸関係についてですが、新聞の地域情報の欄を見ても、新聞には大きなイベントしか出ていませんので、例えば俳句や川柳、短歌の団体がここで勉強会やっているというような情報は掲載されていませんので、イベントの規模によっては、分かる人しか分からないという状況です。イベントの大小問わず、誰もが情報を入手することができて、興味のある人がそのイベントを見に行くことができれば良いと思います。

ちなみに、昨日、博物館の館長に聞いたのですが、17日がえんぶりの日ということで市内の小中学校がお休みで、博物館に70人、特に親子連れが多かったそうですが、来場があったということでした。また、南郷の話も出ましたが、南郷歴史民俗資料館もこの間まで現代刀匠展をやっていたのですが、過去3番目の入館者だったそうです。1番がリカちゃん展で2番が長崎の原爆展と、3番がこの間やった刀匠展だとのこと。コロナ禍にあっても、こういうふうにとくさんの来場がある、そういう情報をもっと発信できれば、街も活性化していくのかなと思いました。

●委員

資料2の中で、私も関わっている横丁オンリーユーシアターのことに触れられていたので、実際にどんなことが起こったかというのを簡単にご説明したいのと、あと幾つか意見を言いたい点があります。

横丁オンリーユーシアターは2009年から始まって、12年やらせてもらっています。これははっちのプレ事業として始まり、はっちと街と一緒に作るアートプロジェクトということが目的で始まったものです。横丁でアートをやることが目的ではなくて、街の人と一緒に共同をするということが目的で始まったものであるため、対象者は、お客さんとして見に来る方はもちろんお客さんですけれども、一緒に作った地域の横丁の方々が重要なパートナーでした。実行委員会も街の方々と一緒にやるので、こんなコンテンポラリーダンスとかやって何になるのか、アートとか訳が分からないとか、これをやっても横丁に人が来ないのではないかというような意見もありましたが、それをアーティストの皆さんが毎年おもしろいことをやって、それを重ねていくことで、何か分からないけどアーティストってすごいなということとか、これをやっていたら何か毎年楽しいなという気持ちが、委員の中に醸成されたというのが一番大きかったことでした。また、アートに関わることもおもしろいなと思った方々が、去年はコロナで大変だったので、やらないという話も出ましたが、横丁の方々が一番初めにやろうと言ってきて、やることに決まりました。アーティストも公募した結果、たくさんの方々が来て

くれたということで、中央からアーティストが応募してくれるほどの企画に成長したというのは、その街の受け入れ体制といますか、そこに来たら楽しいし、横丁というエリアの酒も飲む、はっちにも泊まることができ、楽しいなというようなことで、少しずつ一体感の出るイベントになってきたのかなと思います。ここから先は、今のそのアンケートとか、いろんなビジョンの中にもあるように、より多くの市民が、この文化芸術の成果を享受できる、アートがあるとこんな楽しいというふうに、一人一人多くの人に感じてもらえるように、規模を大きくするのはこのイベント自体はなかなか難しいですが、もっとより多くの人に楽しんでもらえるようにここから10年でまた育てていくという次のフェーズに、このイベント自体はなってきたのかなというふうに思います。これまでは本当に関わる人々というか、内輪を育ててくるのに10年ぐらい掛かったというところではありますが、教育的な意味を考えると、教育と言うとちょっとあれですけども、本当に街の人たちに、そのアートの存在を受け入れてもらったというところまでやってきたというところがあります。

これに関連して資料2を拝見していると、市民だったり、受け取る側に対する配慮というのか、そういうことへの説得みたいなことの内容が多くて、それをする以前に、ひょっとしたらそのアートの意味だったり、芸術家がすごいとは言いませんけれども、どれぐらいの大変なこととか特別な能力とか、尊敬される技術を持っているのかなど、そういうことをもうちょっと同時に市民に分かってもらう必要があるのかなというふうに思いました。今日はご自身が活動していらっしゃるアーティストの委員もいっぱいいらっしゃいますが、その一人一人がやっていることのすごさというのを、もうちょっと若い子もそうですし、社会人もそうですし、高齢者の方にもちゃんとすごさを知ってもらおうというか、価値を分かってもらうということをもうちょっと戦略的にやる必要があるのではないかと思います。

それをオンリーユーシアターなどの小さなイベントの中でやるにはものすごい時間掛かることですが、それをもうちょっと行政で計画的にできれば、一つ一つのやることの説得力というか、市民に対してずっと入る予備知識みたいなことが浸透しやすくなるのではないかなというふうに思いました。それがなくて何をやっても、またこんなのにお金使ったとか、そういうことマイナスのイメージが先行してしまうので、もうちょっと関わっている人・やっている人のすごさというか、すばらしさというか、意義みたいなのが分かってもいいのかなというふうに思いました。実際に、この計画を進めていくときに、例えばまちぐみの活動を見学し、美術館に行き、菱刺しを体験したりというような、何かそういう街中のアートとを体験できるツアーみたいなのがあって、そのツアーに自由参加できるみたいなことをやったりすると、参加のきっかけがない方にもひょっとしたら分かりやすくて、何かできるのかなと思いました。私たちもこの紙の上でだけ計画の話をしていても、なかなか課題とか可能性が見えないところも実際あって、足がかりとしてそういうことをやってみるとか、そういうのは今の時点でもできることかなというふうに思いました。

●会長

八戸市にはフィールドミュージアム構想というのがあり、まずそれはきちんと押さえることが大事だということで、はっちを作る際にも、はっちは玄関で、八戸市全体がミュージアムだという発想がありました。もともとはまちづくりで、観光交流施設として補助金で建てているので、中心商店街の活性化と連動させ、最初は行政、自治体が仕掛けていろんなことをやって、中心商店街が恩恵を受けながらサポートし、最後は市民がそれを支える、あるいは享受し、仕掛けていくという、そういう流れで本来ははっちは動いていると認識していました。最終的には住民が主体ですから、多様なワークシ

ヨップをやったりという話できて、今説明でもありましたけれども、いろんな NPO ができてきたり、団体活動があったりしましたが、その横の連携と、それから絡んでるといえるのか、そういう NPO を高めるといえるのはそういうような組織もひっくるめて、やっぱり必要になってくるのかなという印象を持ちました。資料 2 について、ちょっとレクチャーを受けていたときに、原点に 1 回戻りませんか、はっちを作るとき、市長が多文化と言ったときとかに戻ってそこからやると、つまり過去から振り返っていくと、今我々は何でこういう議論をしているのかよく理解することができます。そこを理解しないままいくと、例えば 10 年後に今やっていることがすっかり忘れられて、全然違うものにいくというようなことになっていくわけですので、やっぱり原点をもう 1 回押さえながらいくと、もちろん役に立たないものとか、必要とされないものが減ってしまうのはやむを得ないし、そういうふうにならなくていいのはできてきたと思います。いずれにしても、そういう八戸の今の流れをきちんと押さえておく、先般はっちの 10 周年のときにそういうようなあれになったかどうか分かりませんが、そこを押さえていくことが、これから美術館ができたときに、はっちと美術館の差別化だったり、機能の連携だったり、いろんなことがこの基本計画の中に反映して、アクションプランの中に出てくるのだらうと思います。そうしないと、それぞれの施設がそれぞればらばらにやっていくということになっていくと、やっぱり行政評価というのが伴いますから場合によってはなくなるというようなケースも出てくることになります。

貴重なご意見、ありがとうございました。そのほかいかがでしょうか。

●委員

先程意見がありましたが、情報を一元化できないかという話について、それでちょっと思い出したことがあります、BeFM さんが作っていると思いますが、インターネットのページで八戸情報チャンネルというのがあって、新聞に載らないところの情報も載っている印象があります。あれはどういうふうな情報を入手しているものなのかと気になりました。

●委員

八戸情報チャンネルは、市役所に投げ込みボックスというのがあり、報道機関向けのプレスリリースがそこに集められるのでその情報を拾っているほか、あとは BeFM のスタッフが見つめてきたチラシとかを集めて入力しているという状況です。そのため、新聞より情報が多いということではないかと思います。

●委員

例えば、八戸情報チャンネルのようなインターネットのページであれば、既にそうやって運営されているところがあるので、どこかを参考にすると、割とすぐに運営することができるのではないかと思います。あとはお年寄りの方はどうしてもインターネットという文化自体、やはり敬遠されるところがあるので新聞がメインとなるのはそうなのですが、八戸の中で強力なツールとして、広報はちのへがあると思います。広報はちのへがはっちであったり、美術館であったり、ブックセンターの情報であったり、そういった情報が全部網羅されている媒体としてあるので、最初、例えばですが、広報はちのへと、ちょっと付録的な、文化に特化した情報をまとめた別冊広報はちのへみたいな形で、それが後々に独立して、広報はちのへから、アート NPO というのがもし立ち上がるのであれば、そういうところを作る主体が変化していくといいのかなと、個人的な感覚ですがそう思いました。

先程、他の委員から横丁オンリーユーシアターの説明がありましたが、はっちの立ち上げ当初の話ということで、そのポータルミュージアムというコンセプトが今も活かされているのか、どうなんだろうと思いました。はっちの立ち上げ当初に、帆風美術館もはっちの中で企画展を、ちょっと共同企画展みたいな形でやらせていただいたことがありました。内容としては、一度やった企画展をはっちという場所を借りて、持ち込みの企画という形で行いました。そのときに、はっちで開催したのもう一つ、帆風美術館のほうでも同時開催ということで、企業が交通費を持ち出しするという感じにはなりましたが、利用するお客さんは格安の値段で利用できるシャトルカーを、バス会社と協力して準備しました。はっちを見学して、シャトルカーで帆風美術館に移動して、美術館を見学して、またシャトルカーではっちにもどってくるというツアーをやりました。利用された方からはおもしろいという感想が寄せられ、やっぱり車を持っていない高齢の方というのも多くいらっしゃるの、もしくはちょっと行ってみるといいうときに、すごく便利なシュチュエーションだったということもあって、利用される方から結構重宝していただきました。その企画展の後もシャトルカーを持続できないかと思い、バス会社と相談しましたが、どうしても持ち出しというところがあつたため、結局長続きしないということで今はやっていません。帆風美術館の場所自体がどうしてもバスが便利ではないので、そこが問題だと感じています。北インターの奥の方に行くと、ツカハラミュージアムさんがあつたり、緑地公園もあるので、本当はそういう機会があれば出掛けたい、行ってみたいという人って結構いると思うので、ちょっと行きにくい北インターや海側の地域を、はっちを拠点にしてつなぐことができないか、足がかりをちょっと担う場がないかというのは少し感じていたことです。

●会長

ありがとうございました。今の話は、買い物難民に関する問題にも繋がりますが、公益性が高ければ税金を投下してでも100円バスじゃないですけども、そういうふうにして路線バスと違うものということができる場合があります。しかし、とあるスーパーでは独自でバスを出して、病院経由で運行するとかそういう事例もあるようです。あるいはアウトリーチという発想で、例えば美術館側から出ていくという、そういうのも一方であるだろうと思います。

先程の意見にありましたが、高齢者の方がどうやって情報を入手するかというのは、これは活字情報が結構多いというのは、文化だけではなく何でもその傾向があります。生涯学習情報も全部そうでした。あとは、今ネット上でやる場合も、情報を発信する側の問題もやっぱり生じてきます。情報を受け取る側もしっかり整理をしないと、情報の中には紛い物もあるのですごく難しいと思います。ふと思い出しましたが、かつてFromAという、リクルートが発刊していたアルバイト求人雑誌ですが、各商店などが求人募集を店先に貼っていたのを、いち早く見つけて、その情報を集約し、冊子にして販売を始めました。その代わり、その情報は1週間でもう色あせてしまいます。この場合も、例えば広報はちのへは2か月前からその情報を出さないといけません。なかなかそういう情報を、早目早目にうまくどうやってやるかというのが難しく、生涯学習情報のときは、市職員があちこち行って、情報をもたらってきて、冊子にしていたんですが、それがなかなか難しくパンフレット形式みたいなチラシになってしまいました。また、東奥日報の夕刊がなくなった際に、新聞と一緒に届くチラシと別の、いろいろなチラシが投函されるようになりました。民間のビジネスというのはこういうものかと驚きましたが、いずれにしてもこの情報をどうやって一元化し、また分かりやすく整理して届けるか、これはやはり発信する側の課題となります。企画する側が情報を出してくれないことには、受けようがないというか、そういう意味では役所が情報を集約することも一つ案だと思います。

それから、ACACでも映写会というのをずっとやっていて、不登校の子でも自由に行きやすいようにこたつを置いてみるなど様々な取組がありましたが、だんだんと、南郷名画座ではないですけども、いい企画だと思ってもやはりどこかのタイミングでやめてしまいます。やり続ける理由や根拠が見つからない、難しいということが分かりました。

●委員

情報に関する意見ですが、高齢者はネットよりも新聞などを使って情報を入手しているという話がありましたが、一括りに高齢者といっても、80代・70代・60代など様々で、大概70代や60代の方はスマホを持っている方が多いと思います。電話やメールの機能くらいしか使えない方も多いということもありますが、コロナ禍においてもアプリの活用がされていたり、これからの福祉とか命に関わるようなところでも、そういった情報通信というところを活用しないと、活用できないということ自体がリスクになるような状況になっている中で、例えばアート関係とか美術関係、文化関係のことをネット上でしっかりした情報を整理して、むしろそれを見ようということの使い方を含めた講習とか、そういう携帯会社がやっているような講習とか、そういった形で高齢者も少しずつネット環境に触れてもらうというような、文化芸術側からの一つの機会として、それが福祉などの色々なところでやっていたら、どんどんそれらに触れる機会が増えると思うので、そういったことも一つかなというふうに思います。

先程、他の委員からもありましたが、なぜアートが必要なのかということに関して、もうちょっと説明する必要があるというような話は私も賛同します。その分野が好きという人以外の人のほうが圧倒的に市民としては多いはずなので、そういった人たちにも税金を使ってとか、そういった人たちにも役に立つということを説得というか、分かってもらうためには、やはりやる側がそういった人たちにもメリットがあるということを説明する、ある種義務のようなところはあるのではないかとこのように思います。

あと、このヒアリングとかなんですけれども、時折こういった形で市民の、民間のほうの意見を聞くということは今までもあったと思います。文化のまちづくりビジョンのときにも、多分アンケートはやったと思いますし、この1、2年でもアンケートやっているとありますが、アンケートをして市民としても普段から思っている・考えていることを書いたとき、それはどう生かされているのかが、それに対する返事というか、そういったものがないと、その市民と行政の信頼関係というところがちょっとなくなるのではないかと思います。逆にアンケートをやればやるほど、前にも書いたけれども何にもなってないとか、書いたことに対して取り組んだかどうか分からないというような状況では、不信感しか募っていかないのではないかと思いますので、例えば年に1回、関係する業界の人たちと行政と話し合う場を作るとか、そこでは練習場所や駐車場の問題など、毎回同じ意見が出されます。でもそれがどれぐらい進展して、どの可能性にチャレンジしてそれが駄目になったとか、そういうことを、あとは行政の論理と民間の論理というものをやっぱ市民としては分からないので、だからそういうことも情報共有として、やっぱり継続的にやるという場があるだけでちょっと違うのではないかと、特にこういった大きなプランだと、多くの活動者にこれを意識して、いろんな活動に取り組んでもらいたいという、それが大前提にあると思うので、そうであればやはり定期的かつ継続的な接触というものを試みた方がいいのではないかと思います。

最後に、また情報についてですが、展覧会とかのイベントだけじゃなくて、はっちとかでも「〇〇について考える」というか、例えば「八戸の演劇の現状について考える」とか、「はっちの今について

て考える」とか、そういう「〇〇について考える」というところの情報もうまくまとめられていたらいいのかなと、それも含めてやっぱりその地域のそれについて考えることではあるので、イベントだけではないと思うので、それをある程度まとまって見ることができれば、そのときは興味なくても後から見たときに、全然違う分野の人が何か解決策を持っている可能性というのは多分あると思います。異分野とか関係ない人たちがむしろ何か可能性を持っていて、入るだけで変わるということはあると思うので、それが資源を生かすということになると思うので、そういった内容もオープンになるよな、見やすいような、一本化というところも含めてそういったものが必要なのではないかというふうに思いました。

●委員長

ありがとうございます。今、オリンピック・パラリンピックでも問題になっていますが、多様性について、最終的には寛容とか包摂とかになりますが、情報は非常に重要だと思います。昔からずっと、情報格差をどうやって埋めるかというのが、生涯学習情報でもそうですが、結局は学ぼうとか見ようとかやろうという本人の主体性の問題だということと終わってしまいましたが、やはりそうじゃない考え方をしていく必要があるだろうと思います。これは話がちょっと飛躍しますけれども、選挙の投票率が下がっているということなどが、既に地域に対する関心を含めて出てきています。そういうことも含めて、まちづくりとか地域づくりというのは考えるべきだと思います。そういう意味では、文化をたまたま題材にしていますが、さまざまな形で自分たちの生き方・あり方をどうしたらいいかというようところにやっぱり重きを置いて、行政はどこまでそれを担保できるのか、セーフティーネットで安全にできるか、それ以上のものは自分たちでお金を出して、そういうようところで全員がというのは難しいから、大多数、マジョリティの人が納得できるようところで落ち着いていく、コロナみたいなことはやはり何とか全員がということになりますけど、いずれにしても、貴重なご意見でした。部外者も含めていろんな意見をいただくと、最終的にはパブリックコメントという、これは青森県以外の人でもウォッチャーをしていますから、多分いろんな意見が出てくるだろうと思います。

●委員

私は、県外から来た人間なので、はっちってすごくありがたい存在だったので、今回その10年目という節目で、これからの10年でどうなっていくのだろうというのを何か力になればと思ったのですが、私が結構気になっていたところが、このヒアリングの中でも1つありまして、八戸は新しい取り組みを行うが、その取り組みが続かないイメージがあるというのが、まさしく私も同じことを思っていたことでした。せっかくいいなという企画やイベント、団体がやっていることがあるのに、それが続かない仕組みが、多分ずっとサイクルとして続いていて、その原因が、多分予算的な問題だったり、人の疲弊だったり、いろんなことが要因として挙げられると思いますが、個人的な感情だと、南郷アートプロジェクトでいろいろ関わらせていただいて、すごい恩があるというか、思い入れがありましたが、今年度で終わりということで、あと南郷自体がちょっと過疎地域であるということもあり、これからどうなってしまうのだろうという勝手な心配ですが、南郷文化ホールも、南郷アートプロジェクトがなくなると使われなくなって行って、南郷名画座の話もありましたけど、せっかくある資源がどんどん、いいものだったのになくなってしまうというのはすごく悲しいなと思っている次第です。どうすればいいんだろうと考えるときに、八戸にはアートNPOが1つもないとっていて、これから八戸工業大学でNPOを立ち上げるというような話を聞いていますが、アートNPOがたくさん増

えていけば良いと思っていて、あとは NPO を支援する NPO というのも必要だと思っていました。私がやっているアートイズというのでも NPO にしようかという話を今進めているのですが、やっぱりいろんな障害というか、乗り越えなきゃいけないことがたくさんあって、なかなか実現できないでいます。そこら辺を行政がちょっと後押しというか、そういうのもしていただけたらなと思っただけですけれども、南郷アートプロジェクトもですが、八戸工場大学も今年で終わりということで、何か節目といったら 10 年の節目だというのはありますが、ちょっともったいない、結構県外のアーティストから「おもしろい取組をしている」と評価があったのがその 2 つだったので、これからどうしていくのかなというのが感想でありました。

●委員

アンケートで浮かび上がってきた課題というのが、非常にシンプルにまとめられていて、とても納得しましたが、これまでの議論の中でも、活動者の視点の「活動への認知や参加が広がらない」というところは、観客の視点の「認知の低い人は感心も低い」というところと密接につながっていて、そこからちょっと感じたことは、「ポイント 4 計画の時間軸」で最後のほうに、「変わったね！」というのが次の牽引になるとありますが、この「変わったね！」というのは、何を変わればいいのかというところで、では認知をする人、つまりアートの重要性であったり、そこに関わりたいという、これまでなかった活動の層が広がれば、その「変わったね！」というところが大きな変化になるのかというところを少し感じました。しかし、これまで認知がない人、その重要性とか関心がない人を広げるというのは非常に難しいことで、他の委員からもあったように、アートというものに対する重要性を広めるということにもつながると思うのですけれども、私は教育機関にいますので、若年層から教育機関の中でアートに触れ合ったり、その重要性というのをそこに根づかせていくというところがやはり大きく、短期間では無理なので 10 年スパンというところで考えたときには、一番有効なやり方になるのかなというふうに強く思っています。それと、現代的芸術文化の振興への取組ということで、教育や福祉等の異分野との連携によるという、そのアートの学びというところの、その実効性とかをどういうふうに深めていくかというのが、一番大きな課題になるのかなというふうに思っていました。ただ、子供たち、大学生もそうですけど、アートを学ぶというふうに構えてしまうと、なかなかうまくいかないところがあるので、まちぐみもそうですし、八戸工業大学でも色々な活動を通して、これまで感じなかったアートに対する目というのが広がっているというような実際的な場面がありますので、そういうところも含めて、やり方・教育の方法というのでもこれからちょっと検討していくべきではないかと感じています。

●委員

他の委員がおっしゃっているようなことですが、アートの重要性というのをずっと言い続けていても誰も体で感じることはできないと思います。今、●●委員がおっしゃったように、「何か楽しかったよね！」「これアートだったの？」というぐらいの、みんなが体験する場とか経験する場がどんどん増えていけば、それが結局教育になるだろう、育成になるだろうと思って、まちぐみは活動しています。「何か分からないけど楽しいよね、でもこれ結局まちづくりの役に立っていたんだ」とか、「これもアートの一部だったんだ」とか、そういうことだと思えます。それで楽しいから来るといって人が増えればいいし、美術館もできますから、美術館なんか楽しいよね、楽しいから行きたいという、そういうものになっていけばいい、それははっちやマチニワにも言えるし、ブックセンターにも言えるこ

とだと思えます。

ちなみに、南郷アートプロジェクトや八戸工場大学が終了するというのは、全部美術館に持っていくっていいことでしょうか。

●事務局

プロジェクト自体は一旦終了しますが、今までやってきたことを今後は美術館でどういう風に表現していいか、美術館につなげていくということになります。

●委員

先日、はっちで開催されたシンポジウムについて、社会人は美術館に行こうというようなタイトルだったと思いますが、とても楽しい内容でしたが、あれもちょっと上からだなと感じる人は感じると思います。アートってすごいんだよ、すごいんだよ、こんなおもしろいんだよってこの何十年と言い続けて、特に日本では、難しくなりすぎてしまい、逆にアートから離れていくというのがアート業界だったような気がします。そんなことで、そもそもおもしろい、楽しいことが自由なんだということから発信できるような、そんなやり方できればいいなと思いました。

●会長

楽しいという気持ちは大事だと思います。学校で、先生は「なぜ今日来たの？」って生徒に聴きませんが、不登校になったら慌ててしまいます。それと同じで、施設も人が来るうちはあまり考えませんが、来なくなったら慌てます。そういう意味ではあんまり敷居を高くしないという感じですけども、いずれにしても、基本計画そのものは先程も申しましたがいろいろ壮大な中でやっていますので、その中で八戸市として、もともと多文化というのがあるのでそれと結び付けて、また、今幾つも施設ができたので、それを横でどうやってつなげていくかということがありますし、もちろん八戸市自体をどうするかということも重要です。青森県全体がどんどん縮んでいく中で、社会福祉法人が社会貢献の一環などで小学校を買い取って、そこで1つのカフェを作るという事例もあります。そういう意味では、ある一定程度は自治体、行政がやって、その後はやはり市民がどうするのかということだと思います。最終的には、個々人がどうやって楽しく生きることができるかということになると思います。そのために学ぶ機会・見る機会・話す機会、その他のものを補償していくということで、たまたまそれが施設であったり、広場であったり、情報であったり、友達だったりということなんですけども、決して閉鎖的にしないということが、最初にこの懇談会の委員になったときに感じたことでした。

●委員

私は県外から八戸に来て、八戸のアートであったり、美術とか文化というのをあまり知る機会が今までありませんでしたが、こうやってこの懇談会に参加して、八戸ってこんなものがあったんだとか知る機会ができました。実はさまざまな年齢の方とか、大人であったりとか、子どもでも楽しめる文化とか芸術あったということを知ることができたのですが、これをいかにさまざまな人に知ってもらえるかというところで、情報発信って大切だということに気づかされました。情報発信でも、すぐに結果が出るものではないと思っているので、継続してたくさんの人に知ってもらえるような、途中でなくならないように、情報発信が消えないように、今後継続して情報発信ができるような仕組みが

できていったらいいなと思いました。

●委員

デーリー東北新聞社では4月から新たなサービス、各種講座だったり、文化芸術のイベントだったり定期的に、毎月開催するというサービスを計画しています。その手始めというわけではありませんが、スマホを持っているけれどもまだ使いこなせてない人、特に高齢者のために、携帯会社の販売店の方を講師に迎えてスマホ教室というのを開いて、スマホを全く持っていない人や持っているけども使いこなせてない人のために無料講座を開くという企画を計画しています。

●委員

この7年ぐらい、県立美術館のほうで演奏をさせていただいていますが、県立美術館のほうでは、県内の演奏家さんと世界的に活躍されている方とのコラボレーションという形で、毎年1回ですけれども、2日間連続でやっています。美術、絵などを見たついでに、そういう青森県で活躍されている方と世界的に活躍されている方との融合も含めて、アレコホールというシャガールの絵が4枚揃っているところで演奏をするというイベントです。青森県内のお客さんは少ないのですが、東京から200人とかいらっしゃるので毎年驚いています。全部で300人くらい入るイベントですが、毎年見たことないお客様がいらっしゃっていて、どちらから来たのかを聞くと、大阪など県外の方が多いため、どういった情報発信を県立美術館のほうでされているのかと思います。館長さんに聞いたら、館長さんが各地に出向いて美術館の宣伝をしているそうです。そうやって自分から、自ら足を歩いて宣伝して、美術だけではなくて、芸術的なことを含めてやっているということを宣伝していて、八戸の美術館も新しくなるのであれば、そういった音楽だけじゃなくっていろんなことをもっと、せっかく素敵なお建物になったので、自慢していいと思うので、「芸術とは」ということをはっちと共に宣伝していただければと思っています。

●委員

私、八仙の酒蔵のほうとか陸奥湊のほうとか小中野とかに行く機会が多いのですが、今回の計画はどちらかというと、中心街のいろんな公共施設や街中のプロジェクトというのが中心かと思いますが、八戸市全体のことを考えると、やっぱり陸奥湊の方もいろんな文化を集積しているところだと思ってしまうので、中心街だけではなく、先ほどフィールドミュージアムの話もありましたが、ひょっとしたらそういう構想で考えれば、地域を、八戸を横断的につなぐようなことで解決できることもあるかもしれないと思いました。広域的に八戸の魅力あるということも、市民の方に発信しなくてはいけないなと思ったので発言させていただきました。

●会長

ありがとうございました。小中野の人々は端っこ商店街と表現しているとか、昔は東北の上海だと言っていたとか聞いたことがあります。いずれにしても、フードミュージアムという大きな構想を八戸市は持っていて、1つ1つの拠点が、施設がこうだというわけではないということです。だからそれを輝かせるためにこういう施設を作っているということをもっとPRできるように、基本計画に落とし込めるように私のほうも努力したいと思いますので、皆さんのほうからも、今日のこの資料を含めて、今までの流れの中で何かお気づきの点、骨格となるような部分にいよいよ肉づけをしていく

ときが結構大変だと思いますので、今後ご意見等を頂戴していきたいと思います。それでは、時間となりましたので、事務局の方にお返ししたいと思います。

●事務局

それでは、これもちまして本日の会議を終了いたします。委員の皆様、本日はありがとうございました。